

草地の利用と管理がもたらす鳥類への影響



SHI Kun
 時 坤
 草地生態部 重点研究支援協力員

世界的に草地生態系の崩壊が急速に進み、鳥類を始め数多くの草原性生物が生存危機にさらされています。日本でも採草地や放牧草地の改廃や不十分な管理により、草原性生物が減少し、その保全が課題となっています。現存の草地の多くは畜産のために維持されており、家畜を生産するとともに多様な生物の保全にも貢献できる環境保全型畜産技術を確立することが求められています。私は重点研究支援協力員として、2000年から栃木県北東部に多く残っている放牧草地や採草地にお

いて鳥類の調査を行い、草地の鳥類群集の生態的特徴やそれに影響を及ぼす環境や草地管理要因を分析し、草地の鳥類保全機能を評価するための研究を行ってきました。

調査の結果36種の鳥類が観察され、これらの草地が多様な鳥の生息場所であることが分かりました。これらの草地は草地で繁殖する鳥だけでなく、周囲の林や村に住む鳥も利用していました。草地で繁殖する鳥類も、高い草丈に依存する長草型草地依存種、短い草丈に依存する短草型草地依存種、短い草丈をより好む短草型草地選好種と草丈に依らない草地ジェネラリストに分けられ(図)、採草地や放牧草地を含む多様な草地が存在することの重要性が示されました。一方で長草型草地依存種のホオアカやセッカ(写真1、2)などの鳥類は、採草地では繁殖期(5-7月)に繰り返して行われる採草の影響でほとんどのつがいは繁殖失敗に終わり、鳥の保全を考慮した草地管理法が必要であることも分かりました。今後、草原性鳥類の保全を配慮した新しい草地畜産技術を確立するには、生態学、畜産学及び社会経済学などの関連分野を統合した研究アプローチが望まれます。



写真1 餌を運ぶホオアカ(小深堀火入れ草地、04.6.25)



写真2 セッカの巣と卵(藤荷田山の採草地、04.6.18)

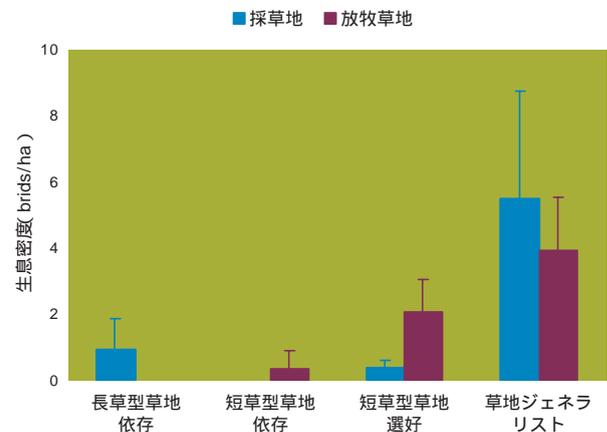


図 草地の管理形態と鳥類の生息地利用パターン